

## 追悼

内田 勉

矢作先生と初めてお会いしたのは 1996 年、フィッツジェラルド協会の例会においてであった。1999 年に学習院大学に赴任することになった私は、前年秋、3・4 年生ゼミの面接をしたが、面接終了後、「よう」と言って、矢作先生が笑顔で部屋に入って来られた。「初めまして」と挨拶した私に、「会ってますよ」と矢作先生に言われ、上記の例会のことを思い出した。例会では話はしなかったのですが、二人が話をしたのはこの時が初めてである。私達は研究室が隣合っていた。顔を会わせることが多くなり、挨拶以外の言葉を交わすことも多くなった。私は矢作先生の研究室に相談に行くこともあり、雑談の為に行くこともあった。稀だが、矢作先生が私の研究室に雑談に来ることもあった。矢作先生は朗らかな人だった。裏表がない。珍しい人だった。一緒に話をしていて楽しかった。普段、笑顔で声をかけてくれた矢作先生の顔が陰しくなったのは、法人の重職に就かれた後であったと思う。お会いすることも非常に少なくなったが、お話をすることも殆ど無くなった。ある時、「法人のお仕事を抱えた上に、授業されるのは大変でしょう」と私は言ったが、「いや、授

業をしているから、やってくれるんだ」と答えられた。矢作先生は母校学習院大学で、学生を育てることに非常に熱心だった。それは愛と同じで、人は真似をすることが出来ない。もっともっと学生に教えたい。もっともっと勉強したい。矢作先生は常にそう思っておられたと思う。研究室での朝 8時から 9時までの 1時間を矢作先生は「宝の時間」とよく言っておられた。公務で忙殺されていた矢作先生は、その時だけ、何ものにも邪魔されず、自分のお仕事に専心出来たのだらうと思う。

矢作先生には非常にお世話になった。庇って貰った、と言ったほうが正確である。恩返しどころか、ろくにお礼も言えないうちに、突然、全てが叶わぬことになった。私は、矢作先生のご逝去がまだ受け止め切れなくて、追悼に適うような言葉を整理できない。今は、矢作先生に出会えた喜びと、先生に対する深い感謝の気持ちを抱きながら、先生のご冥福をお祈り申し上げる。

(英語英米文化学科 教授)